

## 4 ジェノア図

### MAPPA GENOESE



図1 全体図（原画）

#### （目次）

- 1 和訳前半：前号第9号
- 2 和訳後半：同
- 3 イタリア語原文：同
- 4 ジェノア図：今号第10号**
- 5 フラ・マウロ図：次号第11号
- 6 ヴァルトゼーミュラー図：次々号第12号
- 7 ガスタルディ図：次々々号第13号

フィレンツェの国立中央図書館に「ジェノア図」**Mappa Genoese** というのがある。40 x 80cm の羊皮紙に描かれた小振りな世界絵図である。1457 年にジェノヴァで作られたことが知られるだけで、作者は分からない。外枠は球形ではなく先の尖った卵型（アーモンド型）だが、海と大陸の配置と形状はカタラン図（1375 年）に相似する。おそらくそれに倣ったもので、内陸部に描かれている絵図やテキストはそれと一致するものが多い。しかし海洋部あるいは沿岸部、とりわけインド洋から東南アジアにかけてはこの図の方が豊かで、そこにはカタラン図にはないテキストや絵図が見られる。それは、基本的にはこの頃から盛んになるヨーロッパの海洋進出によってもたらされた情報によるものであるが、もう一つにはコンティ旅行記から多くを取り込んだためであることが知られる。

ここでは、その旅行記の紹介の一環として、このジェノア図のそれら洋上および地上に記されているテキストと主な語句を、絵図とともに転写・転記・和訳・注記する。ただし東半分に限る、西半分は東方と係わり深い二つの事項のみを取り上げる。また今回はカタラン図と違って、それらテキストや事項を個々に拡大して転写・転記することはせず、東半分は地域ごとに 6 つのブロックに分けて一まとめにした（西半分は 1 ブロックのみ）。

図は、Library of Congress of America からウェブ上にビュー（拡大可能画面）が公開されている Hispanic Society of America 制作・発行になるファクシミリ版からダウンロードした。転記は、その冊子 *Genoese World Map, 1457, New York 1912*, に収められている Theobald Fischer の解説を参照した（〔 〕内は不明・推定・訂正箇所、（ ）内は訳者補注）（一部 Teresa Ciapparoni La Rocca 氏および Annalisa D'Ascenzio 氏の教示を得た）。注記の部の出典のうち、MP は拙訳「マルコ・ポーロ／ルスティケッロ・ダ・ピーサ『世界の記』」、NC は「ニコロ・ディ・コンティ旅行記」（上記）、CA は「カタラン・アトラス」（拙訳『原典中世ヨーロッパ東方記』）を、数字はそれぞれの章を指す。以下の図 2（p.3）は当図の全体拡大図、図 3（p.4）は東半分拡大図、図 4（p.5）は西半分拡大図である。なお、それぞれの個所で比較参照のためカタラン図の絵図を引用する。また、巻末に当時の世界図をいくつか掲げる。



图 2 全体图





图 3 東半分

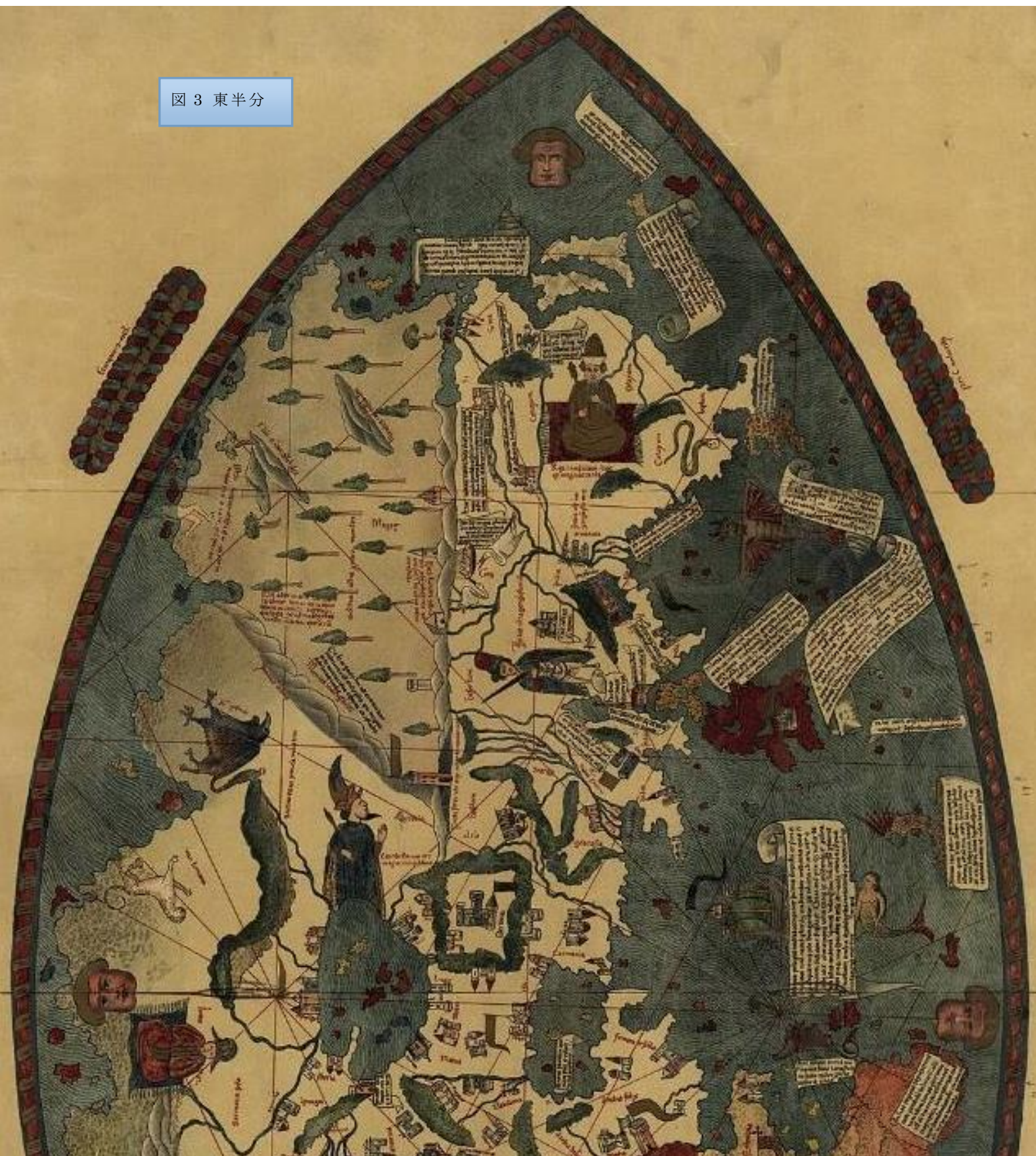






图 4 西半分

1467 (Anno) 1467 1467



## I インディアの海 (図 5)



① [Indi]cus pelagus multis occupatur insulis, scopulis et scirtis, [hec] ideo eorum naves pluribus construuntur medianis, quatenus [si in aliqua eius parte frangantur, pars reliqua ad eorum iter [comple]ndum sufficienter suppleat. Quas etiam pluribus malis de [tri]bus ad X communientes velis quoque ex arundinibus et palma[rum] foliis contextis utentes velocissime suum cursum perficiunt. [Et] eis per maxime speciebus et ceteris aromatibus oneratis, sepius [ad] Mecham Arabie applicantes mercatoribus occidentalibus [per] mutationem mercium iniunt.

インディア海は島や岩礁や浅瀬がいっぱいあり、そのため彼らの船は複数の中仕切り [隔壁] をもって建造される。それのおかげで、たとえその (舷側の) 板が一部破れても、残りの部分がそれを十分に補完する。また、3本から10本の複数の帆柱をもち、葦や棕櫚の葉を編んだ帆を繋ぎ合わせ、そのとても速い航行を実現する。また、とりわけ香辛料その他の香料を積み、商品の交易に行く西方の商人を乗せてしばしばアラビアのメッカに向かう。

(MP 158 「インディア海の船」、NC 46 「インディアの船の形について」)

② Plinius 144 piscium genera enumerat, inter quos hunc serram describit, asserens eum cum eius, eumque crista serrata sepius naves indorum frangere solo impetu, ac ubi serram infra ligna affixerit, ab eis retentus evadere non

valet, se ipsum perimit.

プリニウスは 144 種の魚を挙げているが、その中でこのノコギリ魚 [メカジキ] のことを次のように記している。そのノコギリのトサカでもってしばしばインド人の船を一撃で壊すが、ノコギリが板に突き刺さって抜けないと、そのまま絶命する。

(プリニウス IX-6 : Fischer p.27)

③ In hac mari australis poli aspectus navigant septentrionali absconso.

この南極の海では北極星は目に見えぬまま航海する。

(MP 166 「小ジャワ」)

④ Insularum notarum Traprobana maior que sexdecies contenis milibus passuum patere ambitu affirmatur. Post hanc Anglia, inde Java maior, [inde] minor, post eas Ibernia et Xilana, post quam Cecilia, post [hanc Sardinia, inde] Corsica, inde Cyprius et Candia. Hui[us] [T]raprobana, que eorum lingua Cimiteria dicitur, incole crudeles, aures magnas, in auribus [ornatas habent] linteis vestiti, ydolatre omnes, pipere, camphora et auro plurimo redundantes, pip[er]lis arbor edere si[m]illis grana ut iuniperes fer[ens]. Huius insule partem an[tro]pophagi habitant, continue cum vicinis bellantes, [cal]pita humana pro thesauro recondunt, esis carnibus et qui plura capita habuerit ditior est.

知られる島々のうちトラプロバーナ [タプロバーナ] がどれより大きく、周囲 1 万 6 千パスと主張される。これの次がアングリア [イングランド]、次いで大ジャワ、そして小ジャワ、その後イベルニア [アイルランド] とシラン [セイロン]、その後シチリア、その後サルデニア、次いでコルシカ、次にキプロスとカンディア [クレタ]。このトラプロバーナ、彼らの言葉でキミテリアと呼ばれるが、住民は未開、大きい耳をしておりそこに飾りを付ける、亜麻布の衣服を持つ、皆偶像崇拜、胡椒・樟脳・大量の金が豊富、蔦に似た胡椒の木は杜松 [ネズ] のような実を付ける。この島の一部に食人種が住む、近隣と絶えず戦をしている。人間の頭蓋骨を宝物とみなし、人肉を食らい、頭蓋骨をたくさん持つものほど富める者

である。

(「タプロバーナ」は古来セイロン島のことであったがここではスマトラ島、MP 167「スマトラ王国」、NC 10-11「スマトラ島」。「パス」<歩>は約 150cm。「カンディア」はクレタ島の都市であるが、島自体をも指した。「キミテリア」はおそらく、コンティ「土地の人からシャムテラと呼ばれる」から：NC 10 英語版。)

⑤ *Xilana insula trium milium miliariorum ambitum continens rubinus, saphiris, granatis et oculis gate decora, cinamonum ex arboribus salicibus nostris similibus gignit. In insula hac lacus è in cuius medio civitas nobilis cuius incole astrologie dediti omnia futura predicunt.*

シラナ [セイロン] 島、周囲 3 千マイル、ルビー・サファイア・ザクロ石・ネコメ石に豊か。我々のヤナギに似た木からシナモンが採れる。島に一湖あり、その中央に立派な町があって、住民は占星術に耽り未来を全て予言する。

(MP 173「セイラン」、NC 8「ゼイラム島」。「湖」はプトレマイオスより：Fischer p.19.)

⑥ *Hec figura pibus nuper in Candia, vacas circa litus maris, pascentes de mari exiliens, [invasit qui] captus Veneciis delatus est, cuiusque effigies configurata ad loca multa [terra] est trasmissa.*

この種類の魚は最近カンディア [クレタ] の海岸で (捕らえられたのだが)、牝牛のようで海藻を食べる。捕らえられてヴェネツィアに運ばれ、その姿は型にとって多くの地に送られた。

(おそらくジュゴンのこと：Fischer p.25.)

⑦ *Hic copiose reperitur aurum cum jocalibus et lapidibus preciosis.*

ここは、宝石や貴石とともに金がいっぱい見付かる。

(プトレマイオスでは「アウレア・ケルソネースス」(黄金半島) と呼ばれたマレー半島、Cf. 図 6)





図6 プトレマイオス図：Taprobana（右中央の大島）Aurea Chersonesus（右端の半島）  
Sinae シナエ（シナ・中国、右端下）Serica セリカ（絹の国、右端上）

## II 東の海・カタイ (図7)



⑧ Hostia Gangis fluvii, curus [...] latitudo est XV miliaribus, in cuius ripa arundines adeo magne ut armum excedant insule et nuces quas Indas dicimus procreant.

ガンジス川の河口、幅 15 マイル、その岸の葦は武器よりも大きい、また島には我らがインダスと呼ぶ胡桃が産する。

(NC 12「ガンジス川」。「葦」は竹、「インダスと呼ぶ胡桃」は椰子の実。)

⑨ Sanday et Dandan dicuntur insule iste. Nam Sanday crocea, nuces, muscatas et macis, Bandan vero gariofilorum copiam ad Javas transmittunt, utrisque incole negri sunt. Bandan item [triplicis] generis habet psitacos, rubeos croceosque rostro versicolores et albos. Albi namque galinis sunt pares, qui transeuntibus locuntur et dant responsa.

これらの島はサンダイとダンダンと呼ばれる。サンダイはサフラン・クルミ・マスカット・メースを、一方バンダンにクロウヴをたくさんイアウアに送る。どちらの住民も色黒い。バンダンはまた3種のオウムがいる。赤、サフランと赤の多色のもの、そして白である。白いのは鶏ほどの大きさで、通行人と喋り答える。

(コンティでは「サンダイ」はモルッカ諸島、「バンダン」はバンダ諸島：NC 27-28)



⑩ *Ultra has insulas nulla est amplius hominibus nota habitatio, neque facilis nautarum transitus, quoniam arcentur ab aere navigantes.*

この島より向こうは人間に知られた人の住む地はないし、航海する者にとっても容易く行ける道もない、航海者は空気〔風・嵐〕によって阻まれるからである。

(MP 161「チンの海」)

⑪ *India ultima[ultra] Ganges fluminum. Arnonaata[Argonauta].*

ガンジス川の彼方のインディア。アルノナアタ〔アルゴナウタ〕。

(「アルゴナウタ」は、ギリシャ神話に語られる金羊毛を求めてコルキス(黒海東岸)にアルゴ船で航海した者たち。インディアにまで来たという説はない。)

⑫ *Rex Cams[b]alech, hoc est magnus canis. Catayum*

カンバレク王、これマグヌス・カニスなり。カタイウム〔カタイ〕。

(カンバリク大都の君主クビライ・カアン：MP 76-104、NC 21「カンバル市」、Cf. 図 8 カタラン図パネル VIII-⑤⑥)

⑬ *Huic regione que Catayum vel eorum lingua Cambalec dicitur dominatur magnus canis.*

カタイウム、あるいは彼らの言葉でカンバレクと呼ばれるこの地方は、マグヌス・カニスが続べる。

(「カタイウム」はカタイ、「カンバレク」はクビライが建設したカンバリク大都、同上)

⑭ Cf. V 北東アジア.

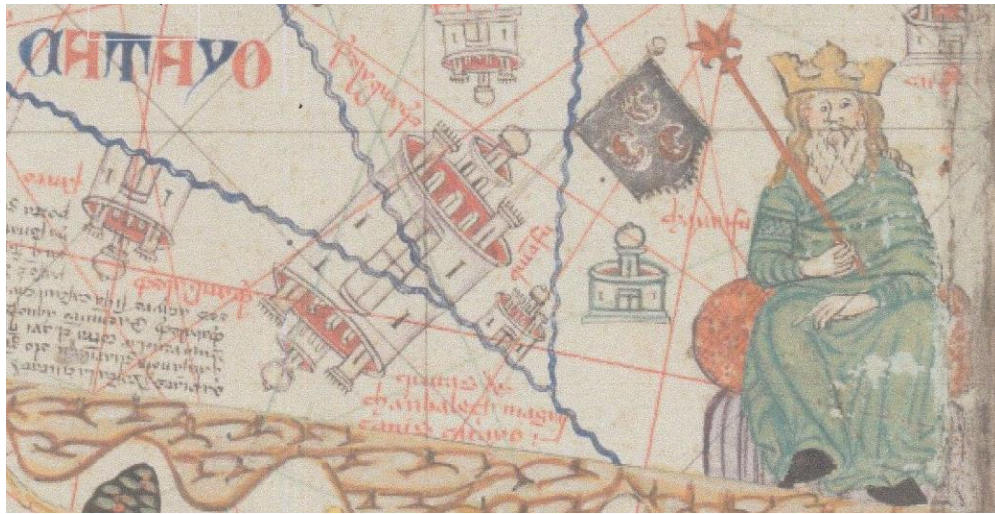


図8 カタラン図パネル VIII-⑤⑥

カタイオ・カンバリク（中央の双子の都市）グラン・カン（右）



### III インディア (図 9)



- ⑭ Hec uxores virorum suorum exequias ignitas vive comitantur et si que pavide renuunt ad id compelluntur.

この妻は夫の火葬に生きたまま殉ずる、もし怖気て拒むとそれを強制される。

(NC 3「カムバイア市」、5「ビジガナル市」、41「妻の殉死」)

- ⑮ Hic jacet corpus sancti Thome apostoli.

ここに使徒聖トマ [トマス] の遺骸が眠る。

(NC 6「アレプル市」(マイラプール))

- ⑯ Provincia hec Mahabaria dicitur.

この地方はマハバリア [マラバール] と呼ばれる。

(NC 6「マラバール地方」)

- ⑰ Caila ubi pro papiro/paipro foliis arborum utuntur.

カイラ [カイル]、紙の代わりに木の葉を使う。

(NC 7「カエル市」)

- ⑱ Hic colligit zenzero/zinziber copiose.

ここはショウガがたくさん取れる。

(NC 3「パカムリアおよびデリー市」)

① India citra Ganges fluminem.

ガンジス川の此方のインディア。

(左の人物は、オリジナル版では **Indorum Rex** 「インド人の王」とある。カタラン図ではステウエ [ステファン] 王、ただし馬上にはない、Cf. 図 10 パネル VII-⑦)

② India ultra Ganges fluminem.

ガンジス川の彼方のインディア。

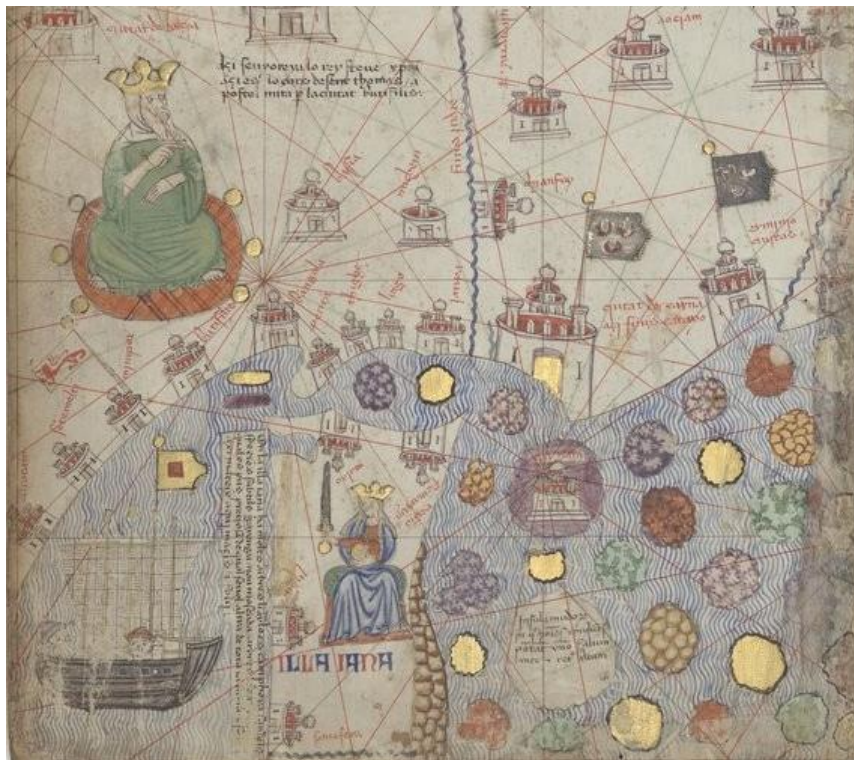


図 10 カタラン図パネル VII ステファン王 (左上) ジャワ島 (中央下)



#### IV 中央アジア (図 11)



②1 Derwent quod lingua eorum id quod porte ferri.

デルベンド、彼らの言葉で鉄門。

②2 Parthia. パルティア

(古代イランの王朝、アルケサス朝・安息、前 247-後 226)

②3 Cambellannas rex, magnis canis filius. Scithia.

カンベッランナス王、マグヌス・カニスの息子。スキティア [スキタイ]

(ティムール (生 1336, 在位 1370-1405) : サマルカンドを中心とするティムール朝の創始者、チャガタイ・カン国出身だがチンギス・カンの系譜には属さない。

「Cambellannas カンベッランナス」は、‘跛者のティムール’を意味する綽名

「Tamerlane/Tambarlaine タメルラン/タンバレイン」より。語頭の c は t の誤読。)

②4 Porte ferri, ubi Alexander tartaros inclusit.

鉄門、ここにアレクサンデルがタルタル人を閉じ込めた。

(コーカサス地方黒海とカスピ海の間狭域にアレクサンデルが鉄の門を築いたとする伝説。モンゴルの登場とともにその彼方に閉じ込められた民族を「タルタル人」とする説が広まる。カタラン図パネル VII-⑩では「ゴグ・マゴグとタルトレ人」。下の地域名 Sesertum<セセルトゥム>は不明。)

㊦ Ymaus montes. Scithia citra Ymaum montem

イマウス山。イマウス山の此方のスキティア [スキタイ]

(プトレマイオスの「イマウス」、東方アジアを西方から分かつアルタイ山脈)

㊦ De hac gente, hoc est ex tribu Dan, nascetur est antichristus, qui magica arte montes istos aperiens ad christicolos subvertendos accedet. Montes inaccessibiles.

この種族、すなわちダン族からアンチクリストが生じ、魔術でもってその山を開いてキリスト教徒を亡ぼしにやってくる。未踏の山々。

(「ダン族」とは、イスラエルの失われた十氏族の一つ(ヤコブの子ダンに始まる)、その中からアンチクリストが生まれるとの伝説があった。)

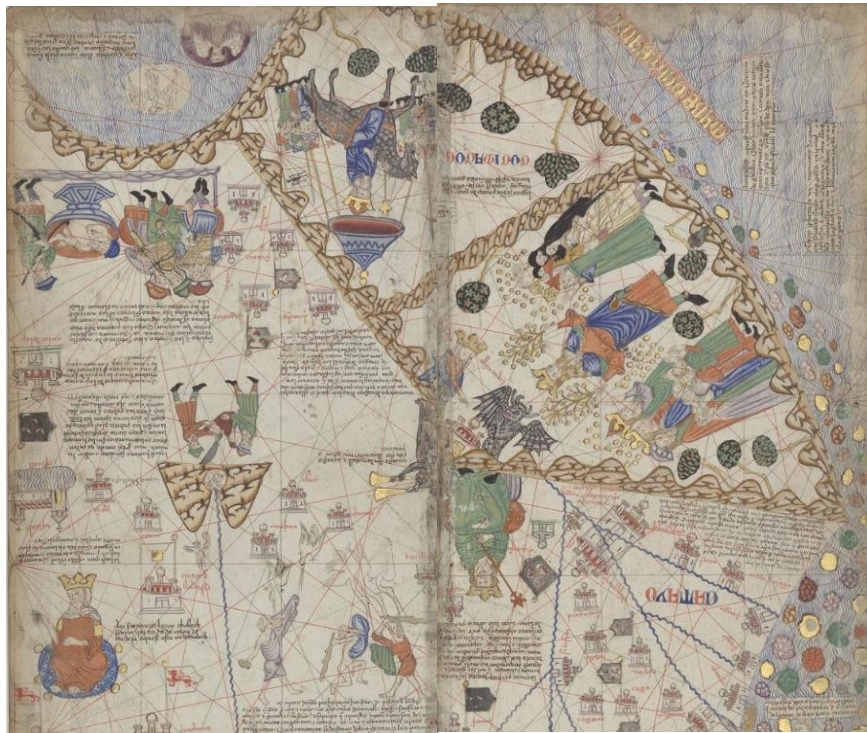


図 12 カタラン図 パネル VII・VIII

- ①ゴグ・マゴグ (上) ②アレクサンデル王 (中央右) ③悪魔 (中央左) ④クリスト (右中央、アンチクリストとする説もある) ⑤マグヌス・カニス (中央下) ⑥鶴と闘う小人 (左下) ⑦殉死する妻 (左上)



V 北東アジア (図 13)



③1

- ②7 Isti sunt ex Gog generatione, qui cubitus altitudinem non excedunt, anni aetatis nonum non actingunt et continue a grubius infestantur. Gog.

これはゴグから出た種族で、身長 1 キュビットを超えず、9 歳以上長生きせず、絶えず鶴に虐められている。ゴグ。

(プリニウスの北方の小人 VII-2 : Fischer p.40。ゴグの種族とする説は他にはない。カタラン図パネル VII-⑩では鶴と勇敢に闘う : Cf. 図 12)

- ②8 Hec provincia, Macina dicta, elephantes gignit. Huius incole serpentibus vescuntur deliciose affatim, et facies suas variis punctis et coloribus stiloque ferrae dipingunt, et sola uxore sunt contenti.

マキナ [マチン] というこの地方は象が生まれる。ここの住民は蛇をととても美味しいと食べる、また顔に種々の針や色や鉄筆で描く、また一人の妻で満足する。

(Macina<マキナ>はサンスクリット語の Maha Chin<マハ・チン、大シナ>、Manzi <マンジ・蛮子>はこれから : Fischer p.52。コンティ (中国には至っていない) ではインドシナ半島北部 : NC 15-19 「マンジ地方」。)

- ②9 Maragama ubi aloes, auru, argentu et gem[m]arum habundant genera.

マラガマ、アロエ・金・銀・宝石をいっぱい産する。

(「マラガマ」は、おそらくコンティの「マアラツィア市」であるが、不明：NC 13。)

③⑩ *In hoc monte gignuntur carbunculi. Sine. Panonia.*

この山には紅玉が産する。シネ。パノニア [パンノニア]。

(おそらくチベット北部：Fischer pp.35-6. 地域名 Sine<シネ/シナ>は、プトレマイオスの Sinae<シナエ>からであるが (Cf. 図 6)、当時この形は珍しい。ただし、プトレマイオスでは Sinae は中国南部で、北部は Serica であったのに対して、ここでは Sine は中国北部に当てられ、南部には Catayum<カタイ>が用いられている (Cf. 図 7)。川 (おそらく黄河) 沿いの都市 Panonia は、フィッシャーによれば<バンコック>。)

③⑪ *Hec insule Jaue dicte sunt, quarum maior tribus alter duobus milibus miliarum protenduntur, absuntque a continente mensis navigatione et ipse sibi[ipsis] C miliaribus propinque. Istas nepharii et immundi habitant hom[ines], quibus hominem occidere pro ludo. Uxores quotlibet sponsant.*

これらの島はイェウエと呼ばれ、大の方は周囲 3 千、もう一つの方は 2 千マイルある。大陸からは航海して 1 か月離れているが、互いには 100 マイルの近さにある。ここには忌わしくおぞましい人間が住んでおり、人を遊びで殺す。妻を何人でも娶る。

(MP 163「大ジャワ島」、ポーロでは「小ジャワ」はスマトラ島、NC 23-25「イェウ島」。

「島」は、図の上の群島ではなく、下 (図 7「II 東の海・カタイ」) の 2 島を指す。記述はジャワの 2 島であるが、カタイの対岸にあって「航海して 1 か月離れている」(MP 159:「陸から 1500 マイル」) のであれば、位置的にはジパングにあたる (名前の似通いによる混同)。コンティにはジパングは登場しない。)

③⑫ *Has turres construxit Presbiter Johannes rex, ne inclusis hominibus ad eum pateat occessus.*

これらの塔は、閉じ込められた者どもが彼のところにやって来ぬよう、プレスビテル・ヨハンネス王が建設した。

(プレスビテル・ヨハンネスも塔を築いて北方の蛮族を閉じ込めたとする説は他には見ら



れない、万里の長城のことか。)

③③ Scythia ultra Ymaum montem. イマウス山の彼方のスキティア[スキタイ]。

③④ Magog. マゴグ。

(通常はゴグ・マゴグと一まとめに呼ばれるが、ここでは別々の民族、マゴグだけが閉じ込められた彼方の地に住むことになる。ゴグは②⑦。)

③⑤ Maius Gange qui aliter Dava dicitur.

大ガンジス、ダヴァとも呼ばれる。

(コンティでは「ダヴァ」はイラワジ川、NC 14「アヴァ川」。)

## VI 北アジア (図 14)



③⑥ **Jordo/Lordo Rex.** イオルド／ロルド王 [ジャニベク]。

(ジャニベク **Jani-Beg** : キプチャク・カン国第 12 代君主、在位 1342-57。1347 年、ジェノヴァに領有されていたクリミア半島カッフアを攻撃したさい、軍中に発生したペストに罹った兵士の死骸をその市中に投げ込み、後のヨーロッパでのペスト大流行の原因を作ったとの伝説がある (真偽不明)、カタラン図 : パネル V-①)

③⑦ **Scythia citra Imaus montem.** イマウス山の此方のスキティア [スキタイ]。

③⑧ **Forma grifonis.** グリフォンの姿

③⑨ **Imaus montes.** イマウス山

④⑩ **Hic adeo ..... habitant ex ebreorum tribus decem generacione cum dimidia Benjamin, qui legis sue effreni degeneres vitam qui ducunt epicuriam.**

ここには、ヘブライ人の十氏族がベンヤミンの半分とともに住み、その法によって恣に墮落し、快樂的な生を送る。

(「ベンヤミン」は、古代イスラエルの十二氏族のうちユダ族とともに南王国を構成する一氏族。)

④⑪ **Istorum mos est ut senio confecti sese in mari per montes abruptos perimant.**

彼らの習し、年老いると絶壁から海に身を投げる。

(プリニウスに記される北方アジアの風習、**Plinius IV-26 : Fischer p.38.**)

④⑫ **Montes inaccessibiles.** 未踏の山々



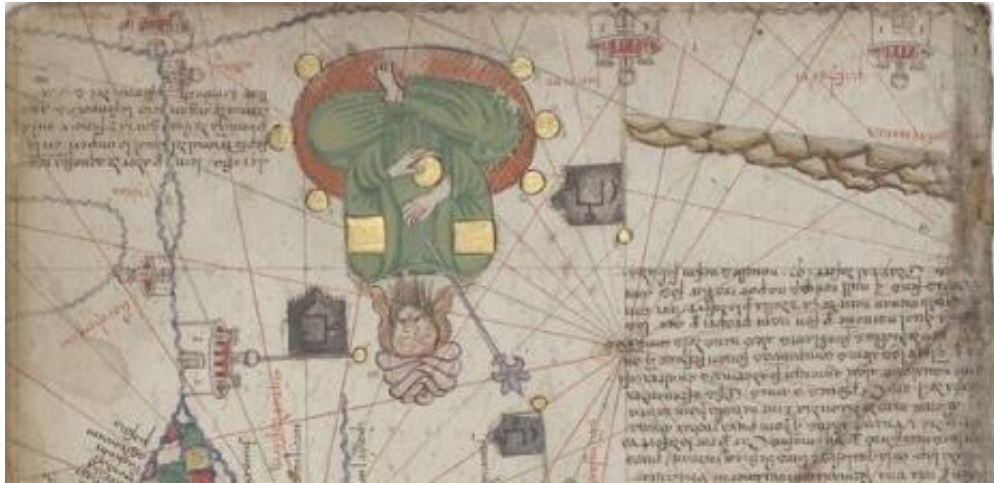


図 15 ジャニ・ベク カタラン図 パネル V-①



図 16 ティムール／タメルラン (IV-㉓)

作者不明 15世紀頃のコピー (Wikimedia より)

## VII アフリカ南部 (図 17)



④④

### ④③ Presbyter Iohannes Rex. Ethiopia.

プレスビテル・ヨハネス王。エティオピア

(この時代になると、司祭王ヨハネスはインディアからアフリカに移る。手にしている旗には十字が描かれている、Cf. 図 18, カタラン図パネル III-⑩)

④④ In hac regione depinxerunt quidem paradisum deliciarum. Alii vero ultra Indias ad orientem eum esse dixerunt. Sed quoniam hec est cosmographorum descriptio qui nullam de eo fecerunt mentionem, ideo omittitur hic de eo narratio.

かつて確かにこの地域に喜びの天国が描かれた。別の者たちはまた、それはインディアの彼方の東方にあると言う。しかしこれは、それについて何も言及しなかったコスモグラファーたちの絵図であるから、それについての説明はここでは省略される。

(地上楽園は通常東方にあるとされたが、それを南半球に置く試みはダンテ「神曲」に始まる。しかしその後その説は継承されなかった。マルコ・ポーロやマリニョッリではセイロン島、コンティには地上楽園の記述はない。)

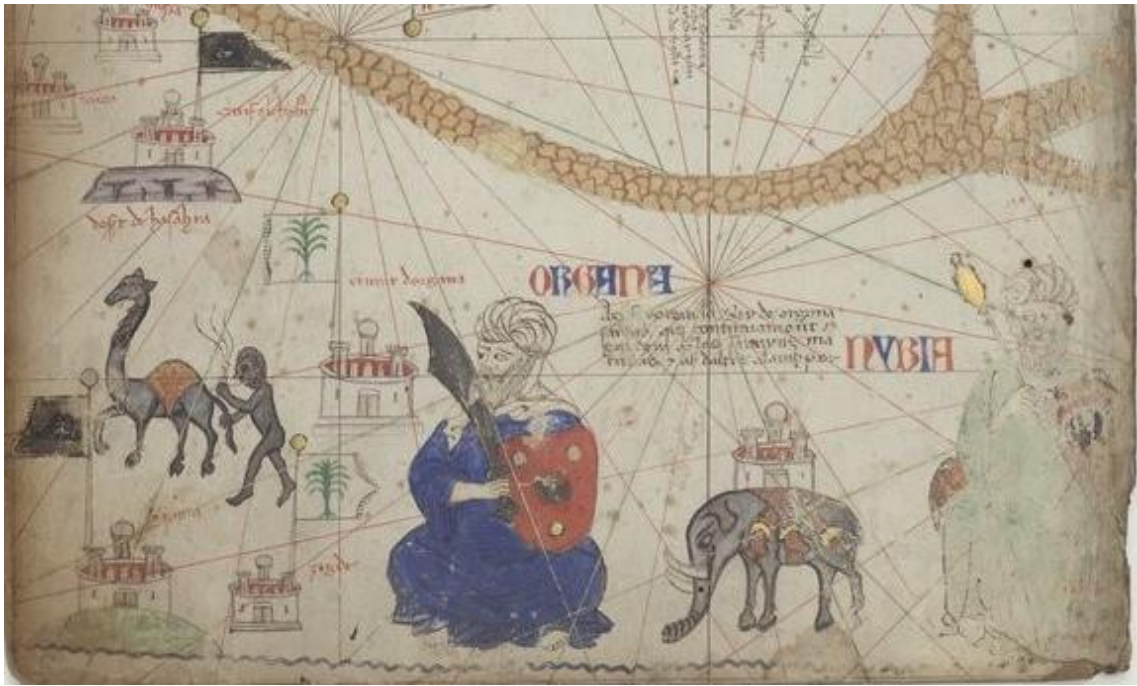


図 18 アフリカ・リビアのプレスビテル・ヨハネス王（右下）（カタラン図 III-⑩）



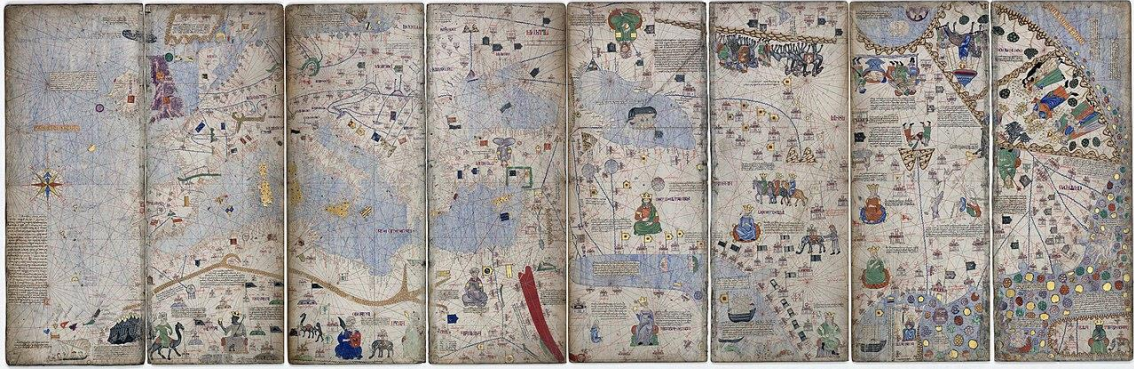


図 19 カタラン図 パネル I~VIII クレスケス父子作 1375年 スペイン・マヨルカ島

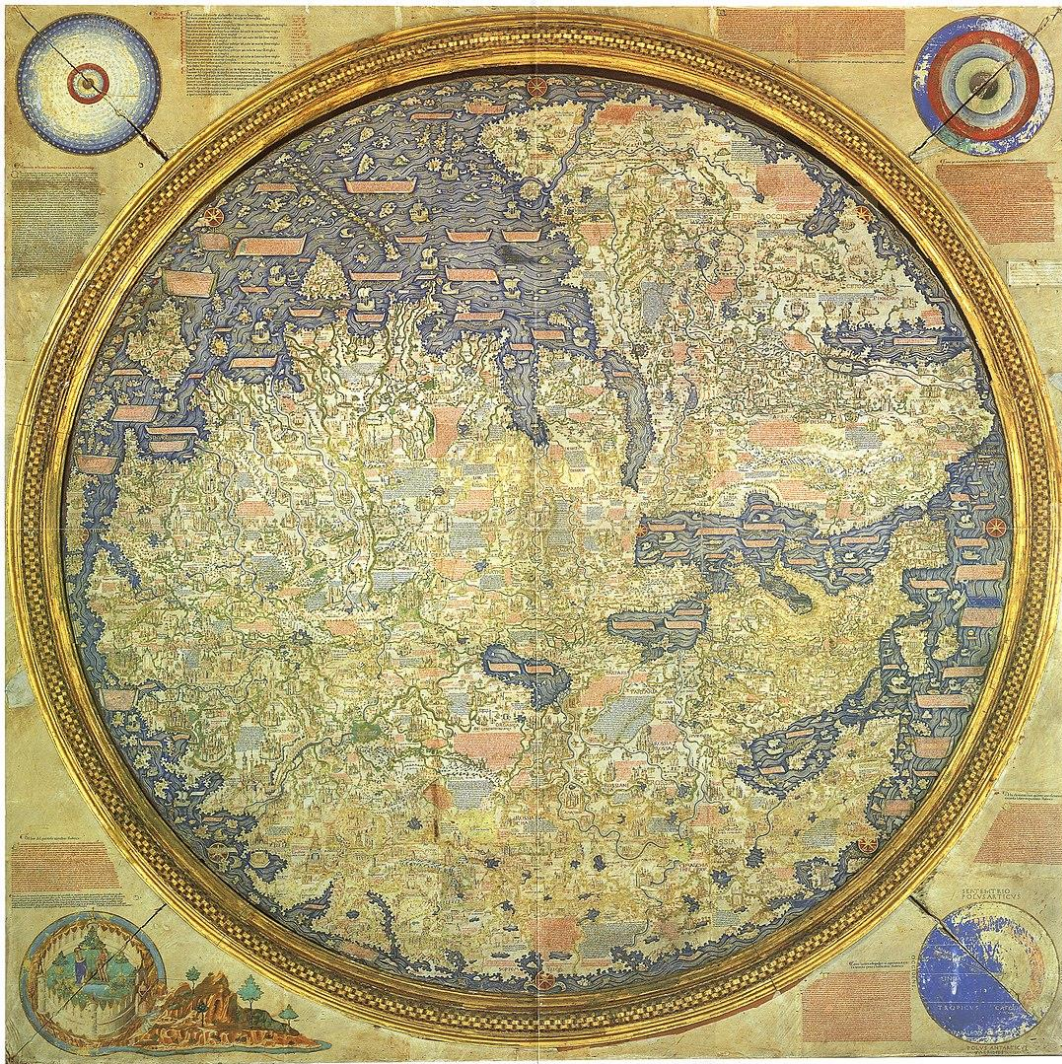


図 20 フラ・マウロ図 c 1450 イタリア・ヴェネツィア (サン・マルコ図書館蔵)





図 21 ヴァルトゼーミュラー図 1507年 ドイツ





図 22 ガスタルディ図アジア c 1550 (ヴェネツィア総督宮)



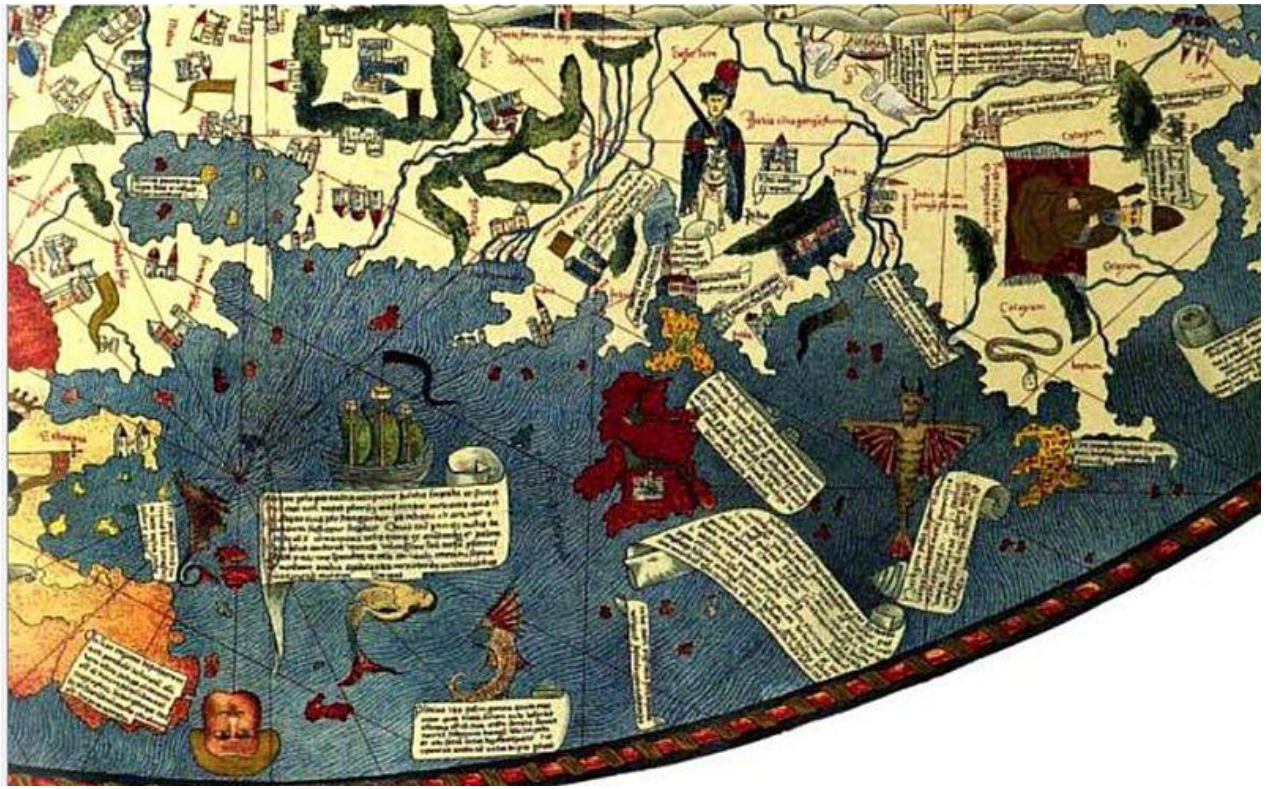


図 23 ジェノア図 南の海 アフリカ・アラビアからカタイ・マンジまで